

思い継ぎし梅の花

東風吹かばにほひおこせよ 梅の花

主なしとて春な忘れそ

人はいさ 心もしらず ふる里は

花ぞ昔の 香に匂ひける

幽香さんが詠ったふたつの歌は、私も授業で聞いたことがあるものだった。

ひとつめは菅原道真のもので、ふたつめは紀貫之の作だと習ったけれど、詳しい意味までは良く知らない。

「貴方にはこの歌の通り、梅の花があうと思うの」

日傘をさしたあのひとは、弾幕に打ち抜かれた私を見下ろして不敵な笑み。

その意味を聞いても幽香さんは答えてくれなかったけれど、答えなかったということは自分で考えろということだと、八坂様は仰っていた。

「そう言われても…」

思わず私、東風谷早苗は口に出してつぶやきながら、境内の掃除をする手を止める。

考えてみれば、自分にはまだ知識や経験が不足している。あの天人や尼僧も頻繁に故事に由来する言葉を使うけれど、言っている意味が良くわからない。

だからこそ言ってきたんじゃないの、と諏訪子様は仰る。それが幻想郷に生きる先達としての助言なのか、ただの戯れなのかは分からないけど、と加えて。

諏訪子様曰く、菅原道真は同業者らしいのだけど、歌の成立した背景くらいは知っている。



奉納

権力闘争に敗れて北九州の大宰府に飛ばされた人間の望郷の念を歌ったのがひとつめの歌で、もうひとつは人の心の移ろいややすさと変わらぬ花の美しさを対比して皮肉った歌だと、参考書に載っていた。

『そうそう、紀貫之の方の奴だけどね。その花って梅のことだよ。今じゃ花といえば桜だけど、昔は花っていうと梅のことだったからね』

ということはどうやら梅の花が中心にすえられた歌で、その梅を私になぞらえているんだと思う。特にひとつめなんて私の苗字にもなっている東風が入っていて、とても思わせぶり。

それじゃあ何を言いたかったんだろう、と私は考えをめぐらせていく。

ひとつめの歌で梅が象徴しているのは道真が残してい

くことになった家族や、友人たちのことだと思う。自分の大切な人たちを残して大宰府に隔離されることになった彼にとって、東風に乗って梅の香りが届くことだけがその絆の証に思えたのかもしれない。

でも、人の心や絆は変わりやすいもの。あいまいな心に対していつまでも変わらない梅の花。だからふたつめの歌で紀貫之は「人はいさ」と、強調して区別したんだと思う。

移ろうものを繋ぎ止める象徴としての梅の花、なんて言うとう格好つけすぎかもしれないけれど、ふたつの歌から導き出される梅の意味はそんなところじゃないかと私は考えてみた。

「うん、そつよ。そつに違いないわ」

ひとりで合点しながら、私はうなずく。こういう謎解

きも分かってくれば面白いかもしれない。少し興奮しながら私は自分の考えを口に出していた。

「ならこの梅が私だとするとつまり……私は、変わらない信仰の証……?」

八坂様も諏訪子様も外の世界での信仰を失って幻想郷へとやってきた。おふたりに仕える身の私らしいといえればそれまでだけど。幽香さんがそうたとえてくれるのが、少し嬉しかった。

ひよっとしたら全部私の勝手な思い込みかもしれないけれど、なんだか歓迎してくれている気がして、いつの間にか私の顔はほころんでいた。



「早苗が喜んでいたらよ。お前に歓迎されているみたいだつてね」

「あら、少しは分かってくれたのかしら」

「そうでなければ、あんなことを言ったりしないんじゃないかないか？」

「まあそうなんだけれどもね」

早苗が境内で考え事をしていた日の夜、同じ境内で八坂神奈子と風見幽香は杯を酌み交わしていた。話題となるのは神奈子が目をかけている早苗のこと。

「完全な正解ではなかったけれど、上出来かな。早苗はまだ若いのだから」

過保護なこと、と幽香は笑う。

「梅の花は雪解けのころ、他の花に先駆けて花をつける。つまりは進取の気風の表れだ。早苗の指摘した側面との

両面があればこそその梅の花。違うかな？」

「いいえまったくその通りよ。満点過ぎて追加課題を出したいくらいだよ」

それは勘弁してもらいたいねと今度は神奈子が笑う。

神奈子と幽香。共に力を誇る存在だが、普段はこうして杯を傾けていることが多い。そのまま山を揺るがすような戦いに興じても良いのだが、目ざとい天狗たちに様子を写真で撮られて新聞のネタにされるのも面白くないので、それはしない。

だからこの場で飲むときは静かに飲むとき。そんな暗黙の了解がふたりの間にはあった。

「若い世代とは良いものね。成長するのを見る喜びもあれば、からかうのも面白い」

「その中にうちの早苗も含めてくれるのかな？」

「彼女に言った通りよ」

「なるほど」

神奈子は鷹揚にうなずく。その様子が満足げなのは、恐らく早苗が幻想郷の住人たちに受け入れられているかどうか心配だからなのだろうと幽香は予想した。

「若い時節というのは兎角結論を急ぎたがるものさ。結果が出ぬと言っては苛立ち、次から次へと目標を貪欲に求めていく」

「あの子もそういう傾向はあるわね」

「ああ。そこから学ぶことがあるのは事実。しかし私が心配してしまうのも事実なんだ」

神奈子は語る。風祝(かぜはふり)として幼い頃から自分の傍にあった少女に対する想いを。もっともその大半は、東の端に住まう巫女と同じく異変を解決すると言

出した彼女に対する不安であったが。

それを幽香は嫌な顔ひとつせずに聞く。その間にも杯はどんどんと進んでいるが、顔色ひとつ変わらない。

「信仰をよりどころにする神々にとって多面的な性格は重要な要素のひとつだ。一方向に偏る力は強靱に見えて存外もろい」

「でも若い子たちはそのことが理解できないでしょう。それが無謀さであり、蛮勇でもあるのだから」

「その通り、その通りさ。だから私もあの子の行動に口は出すが見守ることしかしない」

「それが賢明よ。彼女の中にある芽を育むためには風雨にさらすことこそが大切なのだから」

幽香の言葉に深くゆっくりとうなずく神奈子。杯を口に運び一気に流し込むと、ふう、と息をついた。

「でもやっぱり心配なんでしょう？」

「普通、それを聞くかな？」

答えず幽香が見つめていると、神奈子は首を何度か横に振りながら大きくため息。

「……どこに行くにもついてゆきたいくらい、心配さ」

でしょうねえ、と幽香は破顔一笑。神奈子は聡明だ。

それをしてはならぬと分かりながら、一方での親ばかさが彼女を傍から見れば随分と幸せな悩みに誘うのだ。

「面倒なことよねえ、こういう立場は」

「おや、分かるのかな」

「昔ちよっと、ね」

と答えてそれ以上は語らず、幽香は杯を飲み干した。

神奈子も詮索はしようとせず、静かに杯を傾げる音だけが響いていた。